



2008年1月31日

各位

川崎近海汽船株式会社
代表取締役社長 森原明
(問合せ先)
経理部長 高田雅彦
TEL:03-3592-5829
経営管理部長 友井彰彦
TEL:03-3592-5816

当第3四半期(2007年4月1日～2007年12月31日)におけるわが国経済は、堅調な民間設備投資を背景に景気は総じて緩やかな回復基調を辿りましたが、原油価格の高騰や米国のサブプライムローン問題による金融情勢の悪化等により景気の先行きは不透明な状況になっています。外航海運においては引き続き旺盛な原材料需要を背景に海上輸送量は高水準に推移していますが、内航海運は、燃料油価格の高騰等により依然として厳しい経営環境におかれています。

このような状況下、当社の第3四半期の連結売上高は345億80百万円となり、前年同期に比べて19.4%の増収を確保し、連結営業利益は31億65百万円となり前年同期に比べて32.5%の増益、連結経常利益は29億50百万円となり前年同期に比べて31.3%の増益、連結当期純利益は19億77百万円となり前年同期に比べて53.3%の増益となりました。

第3四半期比較(連結ベース)

(単位:百万円)

	2008年 3月期			2007年 3月期	増減額	増減率
	4-9	10-12	4-12	4-12		
売上高	22,733	11,847	34,580	28,952	5,628	+19.4%
営業利益	2,237	928	3,165	2,389	776	+32.5%
経常利益	2,053	897	2,950	2,246	704	+31.3%
四半期純利益	1,181	796	1,977	1,289	688	+53.3%
為替レート	¥119.86	¥114.57	¥118.10	¥116.18	¥1.92	1.6%
バンカー価格	¥56,000	¥64,250	¥58,750	¥52,283	¥6,467	+12.4%

事業の部門別業績概況は次の通りです。

「近海部門」

不定期船部門では、石炭、ドロマイト等の輸送量は増加傾向にあり、市況は引き続き高水準で推移しました。定期船部門では、往航のタイ向け鋼材輸送量が好調な反面、復航のガ・サラクからの合板輸送は、港頭在庫の増加や新規住宅着工率の低下の影響を受け輸送量は減少しましたが、石膏・砂糖等ばら積み貨物輸送を積極的に取り込みました。

同部門の連結売上高は147億65百万円となり前年同期に比べて17.1%の増収となりました。

「内航部門」

不定期船部門では、鉄鋼業界の粗鋼生産が高水準で推移するなかで昨年10月には大型化した石灰石専用船“美津川丸”が竣工し輸送力増強に寄与しました。

定期船部門では、紙専用船は長期契約により引き続き安定した輸送量を確保しました。国内定期航路でも投入船腹の効率化を図るため船舶の入替えを実施、10月から常陸那珂航路に“ほっかいどう丸”を投入し北海道から九州への新規中継貨物をはじめ更なる貨物獲得に積極的に取り組みました。

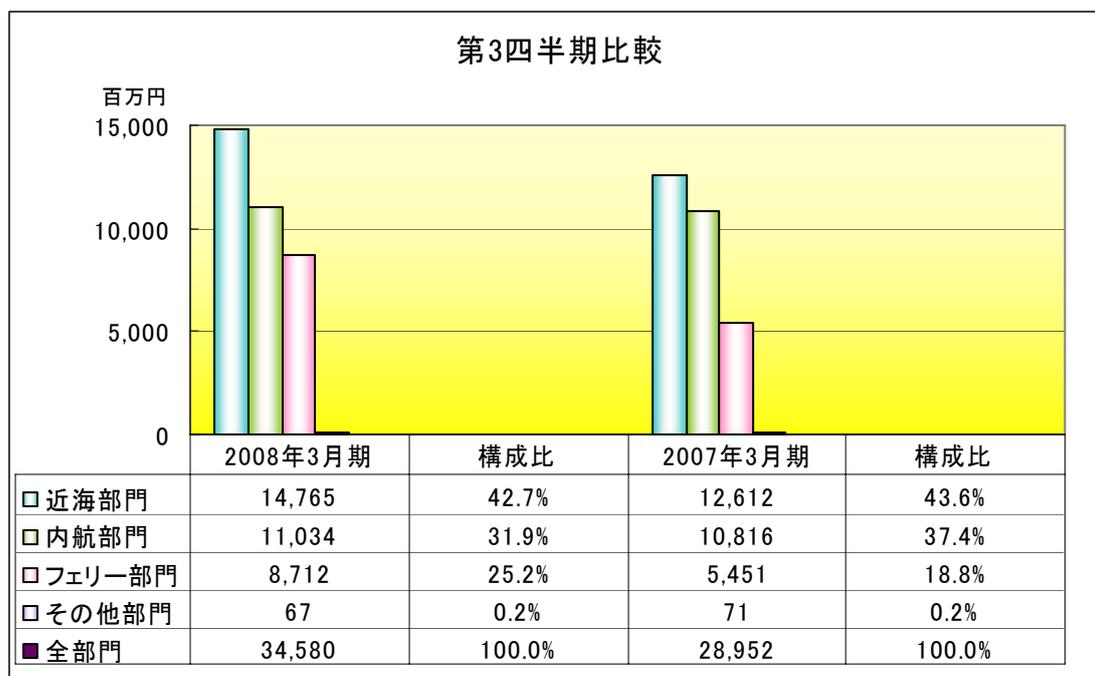
同部門の連結売上高は110億34百万円となり前年同期に比べて2.0%の増収となりました。

「フェリー部門」

八戸／苫小牧航路は、一昨年12月に1日4便体制に増便し、効果的な営業活動を展開した結果、トラック輸送量及び旅客輸送量は前年同期に比べて大幅に増加しました。さらにサービス面でも苫小牧発の運航ダイヤの一部変更を行い、八戸到着を2時間早めるなど顧客の利便性の向上に努めました。

東京／苫小牧航路では、昨年4月から3隻によるデイリーサービスに移行しておりますが、10月から内航定期船部門の常陸那珂／苫小牧航路に就航していた“げんかい”を投入すると同時に苫小牧発の時間帯を延長し輸送量の増加を図りました。

同部門の連結売上高は87億12百万円となり前年同期に比べて59.8%の増収となりました。



連結業績予想の進捗状況

2007年11月7日付けで公表しました連結業績予想については現時点においては計画を上回る業績で推移しておりますが、第4四半期では、建設資材等の荷動き低迷、円高傾向、燃料油価格の高止り等を勘案し、通期予想につきましては、現時点では変更ございません。

(単位:百万円)

	2008年3月期 第3四半期	2008年3月期 通期予想	進捗率(%)
売上高	34,580	45,000	76.8%
営業利益	3,184	3,400	93.6%
経常利益	2,956	3,200	92.4%
当期純利益	1,981	2,100	94.3%

以上